２０２１年歴史教育者協議会全国大会 障がい児教育

三重県立飯野高校定時制講師 中嶋千絵

テーマ 「特別支援学級における介助・支援員の役割」 ～保護者と支援教員・支援員（介助員）との在り方

このレポートは亀山市の小学校・中学校での実践報告です。 三重県で小学校・中学校で教員生活３６年勤務した記録です。障害児教育と関わりを持ったのは、教師１年目の学校です。小学校２年１７名の単学級です。その一人に修学猶予（２年）の A 男がいました。体も大きく、健康で、毎日登校しました。気分が落ち着かないと暴力を働くので、周りの保護者から理解は得られませんでした。時々校長と家庭訪問をし、学校の様子を知らせました。そして養護学校を薦めたのですが断られました。中学校に進学の時に養護学校に進学したと聞きました。

その後特別支援学級が置かれるまでは、クラスに 1 ないし２名は在籍していましたが、特別な支援等したことはありません。クラスの中で人間関係で苦労したこともありませんでした。しかし勤務してから２０年した頃から何か子どもの様子が変だと感じ始めました。４５分間座ることができない、立ち歩く状態「はい回る子」と言われる子どもが必ずクラスに２・３名おり、全体がそれにつられる状態が出てきて教師の学級経営や学習指導に困難が伴うようになり「学級崩壊」と呼ばれる状況と「ADHD」という名前で子ども達をくくることになりました。教師の精神疾患・休職が多くなり、「普通の子」にしたいが目標になり始めました。その時子どもの教育環境や家庭の環境を知らなければ教育画できないと思いました。親と一緒に、その子どものもつ課題を話し合いながらしなければならないことに気が付きました。そして私の 教育論では子どもは育たないと思い、仲間とのつながりを求め研究会や集まり をもつようになりました。特別支援学級ができて、障がい児をどう育てるかについて研究も進んできました。しかし、現状は困難さを深めています。 教員生活を終え、この問題が私の中で解決ができず退職後は教育の世界でなく他の見方ができないかと思い調理師学校で免許を取り、調理と介護の世界で８年間働きました。その後は教育現場に戻りたくて、博物館、学校図書館司書 学童として働きました。その中から、障がい児を支える「介助員」として２年間働きました。その２年の間に感じたことと考えたことを報告します。そして保護者と介助とのかかわり、教師と介助とのかかわりについてどう連携を取っていくかを考えています。

特別支援教育といいながら、介助員は子どものお世話係、教師の下でただ言う通りに働く、何も意見も勉強を見てはいけないというのが現状です。安い賃金で働かされ、まさに労働はブラックです。保護者とのかかわりはとれるのですが、教師が保護者とのかかわりがとれな

い状況があり、うまくこの制度は機能していません。介助員も教師も免許制度が必要です。また、学校と地域がつながり、機能していかなければならないと思います。 また、特別支援が必要な子どもを就労さける場所、居場所をつくることと、将来を見据えることがひつようでしょう。

現在定時制高校の非常勤として働いています。ここの学校は外国籍が半分と不登校の生徒達です。ここで、進学のこと、将来のことを生徒たちと考え合おうと、地域での居場所づくりを目指して小さな一歩から初めています。

次からの実践は、ものすごい制約のもとに介助員として実践した記録です。

亀山市立〇〇小学校でのこと

田園風景と江戸時代の宿場町をかかえる地域です。地域も落ち着いたたたずまいで古くからの住民と新しい住民が共存している町です。学校は地域コミュニテイの学校として教育委員会の指定を受けています。昔ながらの地域の閉鎖性と新しい世代が増えており、両方が混在する町です。町に１校の小学校と中学校があり、保育園は認定子ども園があります。小学校は２年生が３５人の１学級であと２学級です。

その中で支援学級の児童は１９名です。そこに介助員は看護師２名を含み９名です。特別支援学級「たんぽぽ」は自閉２名（1 対１対応）外国生（ネパール）の 3 名です。算数・国語は「たんぽぽ」で後は全て 2 年生の学級です。生活は全て学級で過ごし、取り出しの算数・国語生活単元は特別支援学級です。

Ａ男のこと

A 男は 3 歳の時に自閉と判定を受け小学校から支援学級に入りました。A 男と過ごした 1 年間の実践です。私が A 男に育ててもらったと思います。 どのくらい泣いたでしょうか。どのくらい楽しかったでしょうか。どのくらい喜んだでしょうか。とても充実した 1 年間でした。A 男とは 1 年間一緒に過ごしましたが、今でも月に１回保護者と合って楽しいひと時を過ごしています。

4 月 2 日にどんな子どもかも知らされなくて１９名の支援児童の様子を書いた Ａ4 の用紙を 2 時間でコーデネーターから聞く。A 男は自閉・3 歳程度・「おはよう」しか言葉はなし。との説明だけ。4 日の始業式に昇降口に 8 時にたっていて親から引き取って下さい。非常に不安。立っていると〇〇先生と母親の声。 2 回ほど「子ども食堂」で出会った人だった。A 男も覚えていて笑顔で飛びついてくれた。ほっと安心。言葉は「おはよう」だけ。これからどうやってコンタクトを取ろうかと思っていると、言葉は出ないが顔に表情が現れ、できると思った。2 日目からどうやってクラスに入れようかと思っていたら、手を握ってきて顔を合わせる。どうやって心の繋がりをとろうかと思い特別支援の子どもの本をかなり読んで安心をした。1 学期間は校門から手をつないで楽しく教室に入ることが目標。ずっと言葉がけをする。意外と天気とか見える物を話すと反応するので言葉をかけ続けた。

観察が主な目的で 1 年間の A 男との記録は 大学ノート５冊になった。大事な宝物です。A 男の情報が全くなく、前任者も言葉少なく語ることをしない風潮らしく他の介助員からの情報もない。教育委員会に出向き、指導計画は開示できないかと尋ねると必ず全校指導目標、指導 計画、個人ファイルがありますから、校長に言って開示してもらって下さいとのことだったので、開示してもらった。あまりの文書に驚きました。母親とは 毎日の送り迎えで A 男の様子も聞かせてもらい、帰りは発達障害学童の人が来るので、情報をももらい、学童の療育の勉強のために土曜日にお邪魔させてもらった。保護者とも月 1 回日曜日に「子ども食堂」で会うのでかかわりはできた。 休み時間もずっと一緒なので、外遊びや休み時間の本の読み聞かせで、クラスの子どもとの交流もできた。 ものすごく記憶力がよく、クラスの児童の子どもの名前の座席も覚えている。 字もまだ読めないので名前を教えると、配りものをする。どこに誰のもんがあるかとか、覚え、本を並べ替えをするが元に戻せる。すごい才能におどろかされる。生活科で町探検するが、他の子ども達と見つける物が違い、A 男から学習の広がりができた。相手の感情をよく読み取り、私に言葉はなくても A 男の感じていることは分かるようになった。粘り強くそういう時はこの言葉を使うとか、表現の方法に取り組んだ。運動も好きで、できないことがあると、できるように人から見えないところで努力する。ものすごいプライドの高い子どもです。リズム感が優れており、音楽歌詞は歌えないが、体でリズムをとり、楽しく音楽を楽しんでいた。踊りに興味をもち、運動会のダンスは見事なパパフオマンスを見せた。2 月の雪の日にこのような詩をつぶやいた。本が好きで詩 の本を読んだりして読み聞かせをしたら、「工藤直子 きりん」の本を何度も何度の詩の中の絵「キリンが遠くを見つめている」をずっと見ている。その横顔 はまるで哲学者のようであった。文として発声できないが、単語をつないで 文になるようになってきた。朝の登校時に雪が降り、寒いので手を繋ぎながら、 つぶやいたのを私が書き留めたものである。このようにして、後で読み、文にしていくと、嬉しそうにのぞき込んでくる。

B 男と国際理解とは何か？

B 児はネパール国籍である。ネパールから父・母・B 男・妹の４人家族である。 B 男が妊娠６か月に日本に来日。誕生は亀山の病院である。B 男は入学から支援学級に入る。母親はなぜ支援学級に入るのか理解できない。また、日本の学校制度にも不慣れや経験がないので、理解しづらく、学校も伝える手段が分からない。家庭訪問もせず、ノートで連絡するだけ。母親は英語、ネパール語、民族後の３つを話せる。来日して７年、仕事もパートで働くので、ひらがなはどうにか書ける。話はほとんど通じる。カタカナを学習中で漢字は難しくて勉強はできないと。２年の最初の授業参観の帰りに一人寂しく変える様子を見て、 声をかけると。参観も後の話し合いも分からないので帰ります。と答えがかえってきた。それと友だちがほしいです。との答えが返ってきてので、誰か 支えてくれるひとを探すことにした。連絡先も、家も誰も教えてもらえないの で、B 男にどこか聞き、朝の登校時に待ち受け、家が分かったので、家庭訪問をした。そこで色々な事情を知り、地域の方で登山が趣

味でネパール語が話せる人を紹介した。いきいきクラブが学校と連携をし地域の学校として高齢者を中心に活動するボランティア団体と家族を結んだ。担任も細目に連絡帳で連絡しているのにという言葉が返ってくるので、まさに偏見と差別の目が気になりました。ちょくちょく帰りに家により分からないことがあれば説明によりました。そうしてネパールのことや家族のことを知り、「こども食堂」に誘い、外 国人の人たちともつなぐことをした。父親は大学をイギリスに留学し、卒業後イギリスの軍隊に入ったそうです。母親は元銀行員です。ネパールには娘さん が祖父母と一緒に生活し、大学へ通っている。大学卒業後に日本に来る決断をされたそうです。子ども二人が日本語しか話せないので日本で定住するしかないと。2月に卒業して来日。日本語学校に入学し、テストに受かって準備をしていると、コロナで開校が遅れ、（8か月遅れ）たので、バイトの世話とか、仕事探しを手伝う。現在卒業後の仕事を探している。英語・フランス語・ネパール語・民族語（グルン族）と日本語と話し、現在はほとんど日本語で会話ができる。そこで国際理解の必要性を感じたし、特別支援をどのようにするかを考えた。亀山は外国籍の子どもを支援学級に入れる方法を取っていて三重県は東海地方で一番外国籍の子どもを支援学級に入れている率が高いのです。中学入学に時に母国語を選ばなければならないので、非常に難しい選択を強いられます。現在母親とどうするか考えています。母親は非常に流暢に英語を話されるので B 男に英語を教えられるのに、迷っています。B 男にはネパールのことも知ってもらう為に図書室でネパールの図鑑や子ども向けの図書で話し合いや少しずつ本を使って勉強しています。ネパールの昔話を読み聞かせをしたり、本を使って広げています。おかげで私が勉強させてもらいました。現在も月１回 「子ども食堂」で会って遊んだり、学校の様子を聞いています。とても楽しみ です。本が好きで、体を動かすことはあまり好きではありません。しかし最近いきいきクラブで柔道をしています。体も大きく練習をし、すごく上達しているそうです。父親が送り迎えをして熱心に取り組んでいます。B 男は図形活動 や工作活動に興味を示し、絵が得意です。１年間のカレンダーづくりをして２ 年生の学級に展示します。季節の絵や月ごとの行事の絵を描きます。昆虫の絵が多いのですが実に精密な絵です。そこに詩を作り載せます。擬態語に興味を示し、長い文は苦手です。本は図書室の本を選び読みます。２年生の学級では １年生の時には気が付かなかった B 男の良さに気付きみんなに絵について聞かれると楽しそうにしています。昆虫のことをクラスの子に聞かれると嬉しそうに答えて、時には家で採集した昆虫や魚を飼育箱に入れて持って行っています。 ２年生の時のカレンダーを製本しようとしましたが、どこにしまったかありませんと言われ、家にも持ち帰らせていない現状です。今スケッチブックを渡して、家で描いてもらっています。時々見せてもらっています。支援学級でなく普通学級で学ばせた方がいいのではないかと思うのですが 中々現在の取り組みでは小学校６年間は支援学級から出さない方針のようです。 このこともこれからの課題ではないかと思います。先生の当たり前は子どもの当たり前ではないことを心に刻んでいます。 資料として休憩時間に行った「読み聞かせ」の１年間の実践を載せます。